

2020年度 明治大学

【法 学 部】

解答時間 60分



配点 100点

る

## 世 界 史 B 問 題

はじめに、これを読みなさい。

1. この問題冊子は22ページある。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
3. 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
6. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
7. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず、必ず提出すること。ただし、この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
10. 試験時間は60分である。
11. マーク記入例

良い例	悪い例
	





〔 I 〕 次の文章を読み、下記の間  に答えなさい。

国の経済を発展させるためには政治的独裁が必要であるとして国民の政治的権利を制限しつつ、外国資本の導入を梃子に経済成長を達成しようとする政治体制のことを、開発独裁体制という。

開発独裁体制は、経済成長を達成するためには国家の介入が必要であるとするが、このような考え方は、すでに19世紀のヨーロッパにおいてもみられた。アメリカの独立戦争にも参加した社会主義の思想家   ①   の影響を受けた   ①   主義は、社会を個人の能力にもとづいて「会社」のようなものとして組織化することをと<sup>⑦</sup>となえ、政府の主導による経済成長を正当化する主張の思想的基盤となった。この考え方は、経済成長や産業革命をなるべく早く実現するためには国家の介入が必要であるとする点で、後発資本主義国に適した思想であり、フランスでは実際の政策にも反映されていた。

アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの第三世界では、1960年代頃から開発独裁体制が現れ、軍事力を背景とした強権的支配のもとで、政治運動や社会運動を抑圧しながら自国経済の近代化を強行していくことになる。開発独裁体制をとる国々には、先進国からの   ②   を制限したうえで工業化を図る保護主義的政策(   ②   代替工業化政策)をとる国が多かったが、一党独裁下の台湾、1961年の軍事クーデタにより実権を握った軍人の   ③   (のちに大統領)による強権体制下の韓国、スハルトによる軍事政権下のインドネシアなどのように、このような政策から自由主義的な   ④   志向型の工業化政策に転換することで経済を成長させることに成功した国もあった。開発独裁体制をとる国の中には、農地改革のような格差是正よりも、新技術の導入による食糧や輸出品の増産を図り、また、観光産業の振興などを行<sup>⑧</sup>って、外貨の獲得に努める国もあった。

開発独裁体制をとった多くの国々は、1970年代にはオイル＝ショックにより経済的危機を迎えることになるが、アジア諸国は   ④   を増大させることによりこの危機を乗り越えた。他方、ラテンアメリカ・アフリカでは、1973年の

クーデタにより政権を握った ⑤ 将軍による独裁政権下のチリのように、低賃金を維持して外国企業を誘致し、 ④ 志向型の工業化政策を採用して成功した国もあったが、多くの国は ② 代替工業化政策を維持しており、オイル=ショック後には累積債務により経済を悪化させていった。これらの国々は、開発政策の根本的な見直しを迫られ、国際通貨基金(IMF)や国際復興開発銀行(世界銀行)の要求する経済安定化政策と構造調整政策の採用を余儀なくされた。

開発独裁体制をとる国々は、共産主義の拡大阻止をはかるアメリカなどの西側諸国から、資本主義陣営に属するものとして支持され、経済的にも発展していった。1970年代に入り、経済発展により開発独裁体制をとる国々において中間所得層が形成されるようになると、これらの人々が独裁政権に対して民主化を要求するようになった。他方、西側諸国が<sup>⑦</sup>人権を重視した外交を行うようになり、こうした開発独裁体制をとる国々への国際的な圧力が強まってくると、1980年代から1990年代にかけてこれらの国々は民主的な政治体制へと移行していった。

問 1 文中の空欄の①～⑤のそれぞれにもっとも適切な語句を解答欄に記入しなさい。

問 2 文中の下線部㉗～㉜に関して、下記の間(ア)～(オ)に答えなさい。解答は解答欄に記入しなさい。

(ア) 下線部㉗に関して、このような思想に共鳴し、のちにスエズ運河等の建設にも携わった、フランスの外交官は誰か。

(イ) 下線部㉘に関して、2000年の民進党(民主進歩党)による政権奪取まで政権を担ってきた政党を何というか。

(ウ) 下線部㉙に関して、陸軍が革命評議会の活動を封じ込め、共産党を壊滅させてスハルトら軍部が実権を握るきっかけとなった1965年の事件を何というか。

(エ) 下線部㉚に関して、フィリピンでは新たに開発した稲の品種が普及し、インドでは1960年代末から小麦・稲の高収量品種・麦米二毛作が導入され、収穫量が飛躍的に増大したが、このように、高収量品種への改良や化学肥料・農薬・灌漑などの技術革新によって農産物を増産することで食糧問題を解決しようとする動きのことを何というか。

(オ) 下線部㉛に関して、1970年代の発展途上国支援において、共産主義拡大阻止を重視した外交姿勢からの転換をはかり、人権を重視した「人権外交」を展開した米国大統領は誰か。

〔Ⅱ〕 次の文章を読み、下記の問に答えなさい。

中央ユーラシアには、黒海の北岸からモンゴル高原に至るまで、草原地帯が東西に広がっている。これらの地域一帯には農耕に適する肥沃な土地が多くないこともあり、古くから、各地を移動し主に狩猟や牧畜により生計を立てる遊牧民が生活していた。彼らの生活様態では、生活日用品や穀物等の完全な自給自足が困難である。そのため、彼らはオアシスの民をはじめとした各地の農耕民を相手に、ときには交易を、ときには略奪を行った。遊牧民族の中でも、移動の手段として馬を用いるものは遊牧騎馬民族と呼ばれ、機動力のみならず圧倒的な武力も誇っていた。その中には、強力なリーダーシップを持った指導者の下、各地の遊牧民族や農耕民族を取り込み、「国家」とでもいうべき巨大な遊牧民連合体を形成するものも現れた。

初めてユーラシア大陸東方にて大規模な遊牧騎馬民族として台頭したのが匈奴である。匈奴は前4・3世紀ごろにはすでに、モンゴル高原を中心に活動し、頭曼単于の下、遊牧民の諸族を統合した。前3世紀後半に一旦は、秦の蒙恬の率いる大軍によりオルドス地方から追い立てられ、ゴビ砂漠より北に逃れたものの、同世紀末に冒頓が単于に即位して以降は、や東胡をはじめとした周辺民族を退け中央アジアの大部分を奪い取った。前200年には、匈奴は、前202年に前漢を建てた（高祖）を白登山の戦いにて破った。これをきっかけとして、前漢は、武帝の治世になるまで、匈奴に対し穀物や絹を貢納するという事実上の属国としての立場に甘んじた。

匈奴は、前漢の武帝による積極的な対抗策や匈奴自身の内紛が要因となって、紀元前1世紀に東西に分裂する。そのうち、西匈奴は、前2世紀にを退けイリ地方を支配していた烏孫に一時は勝利を収め、タラス河畔に城を築くなどしたものの、前36年には前漢の西域都護により滅ぼされた。他方、東匈奴は前漢と和親の道を探り、呼韓邪単于と前漢の帝室とで姻戚関係を持つなどして勢力を維持した。ところが1世紀半ば、東匈奴は、さらに北匈奴と南匈奴とに分裂した。北匈奴は西進し、他の遊牧民族らと対立したことで勢力を弱め、1世紀末には西方にて歴史上行方をくらませた。南匈奴は後漢と和親し華北に移住した。

後に、この南匈奴の単于の後裔たちが、八王の乱に乗じて漢を建国し、洛陽を陥落させ西晋を滅ぼした ③ の乱を起こした。遊牧騎馬民族の末裔が、304年に始まり、北部の遊牧民と漢族らが興亡を繰り返す五胡十六国時代の引き金を引いたのである。

匈奴以降も、様々な遊牧騎馬民族が勃興した。その一つとして鮮卑が挙げられる。鮮卑は、元は匈奴の支配下にあったものの、檀石槐の指導の下で2世紀に台頭し、同時代には現在の中国東北部から⑦ ジュンガル盆地に至るまでの大版図を実現した。檀石槐の死後、統一勢力は分裂したが、このうち鮮卑の一氏族たる ④ 氏が、五胡十六国時代に道武帝の下で北魏を建て、太武帝の治世の439年に華北を統一した。以降、北魏から隋、唐へと至る一連の王朝は、④ 氏と漢人の貴族を中心として形作られ、彼らにより遊牧民と漢人の融和がはかられた。北魏における漢化政策は、現在の内モンゴル地域の遊牧民族の反感を招き、534年頃に北魏が東西に分裂する要因ともなった。

華北が一旦は北魏により統一された後、なおもモンゴル高原を中心に遊牧民族の興亡は続いた。ゴビ砂漠の北においては、鮮卑から分離した柔然が新たに勢力の中心となった。柔然は、遊牧民族の「君主」を意味する可汗の指揮の下、5世紀までには大興安嶺から天山山脈まで勢力を広げ、他の遊牧民族と連合しつつ北魏とたびたび対立した。しかし元々アルタイ山脈で遊牧していた突厥が西方から侵入し、高車の反乱を経て弱体化した柔然を555年に滅ぼした。559年ごろ、突厥は、⑤ の治世の下で最盛期であったササン朝ペルシアと同盟を結び、エフタル等の西方の遊牧騎馬民族を挟撃、制圧し、中央アジアからモンゴル高原に至る広範な地域を支配した。ただし、突厥も583年には東西に分裂した。東突厥はモンゴル高原を主に支配し、西突厥は中央アジアとタリム盆地を主に支配したが、いずれもが次第に勢力を弱め、7世紀には唐の支配下に置かれることになる。

以降も、中央ユーラシア各地では、ウイグル、契丹などのような遊牧騎馬民族が次々に台頭し周辺諸国と関係を持ちながらも、また衰退していった。このような状況は、チンギス=ハーンの率いるモンゴルの大帝国が13世紀に現れるまで続いた。



問 1 文中の空欄の①～⑤のそれぞれにもっとも適切な語句を解答欄に記入しなさい。

問 2 文中の下線部㉗～㉚に関して、下記の間(ア)～(オ)に答えなさい。解答は解答欄に記入しなさい。

(ア) 下線部㉗に関して、山麓沿いにもみられたオアシス都市においては、山麓に水脈に達するまでの深い井戸を掘り、そこから平野部に向けて一定距離ごとに複数の豎坑を作り、それらを地下水路でつなげるという灌漑方法によって水を確保していたとされる。前8世紀のイランにおいてすでに存在していたといわれるこの灌漑方法・施設を何というか。

(イ) 下線部㉘に関して、一説によれば、この北匈奴の一部が4世紀頃に現れたフン族の支配者になったとされる。このフン族は、ゲルマン諸民族がローマ帝国内へ移動するきっかけをもたらした。古代ローマにて98年頃に著された『ゲルマニア』には、この移動が起こる前のゲルマン民族の慣習、社会制度、風俗等が記述されているが、これを著した歴史家は誰か。

(ウ) 下線部㉙に関して、この「ジュンガル」という呼び名は、18世紀半ばまでこの盆地を版図の一部として擁した史上最後の遊牧帝国といわれるジュンガル・ホントイジ国に由来している。清は、この国を滅ぼした後、同地域を含む東トルキスタン全域を統治下におき、そこを「新疆」と称した。このときの清の皇帝は誰か。

(エ) 下線部㉚に関して、この治世に北魏の国教が道教と定められ、これがきっかけとなり廃仏と呼ばれる仏教の大規模な弾圧が行われた。新天師道という教団を創始し、崔浩と共に太武帝に道教の信仰を勧めた宗教家は誰か。

(オ) 下線部④に関して、ウイグルは、突厥と同様に独自の文字文化を有した。その文字はウイグル文字と呼ばれ、アラム文字を起源とするイラン系民族の文字から作られたとされる。その民族は、東西中継貿易にて活躍し、ウイグルにはマニ教を伝播させる等、文化的にも強い影響を与えた。この民族は何と呼ばれているか。

〔Ⅲ〕 次の文章を読み、下記の問に答えなさい。

1762年に公刊されたルソーの『社会契約論』は、鋭い批評精神でヨーロッパ各地の思想家と権力者の関係を描き出している。近代の啓蒙思想のなかにあつてどこか異質さを感じさせるルソーの著作は、ヨーロッパの歴史をさまざまな角度から詳細に検討することで展開されているのが特徴である。ルソーの『社会契約論』をひもときながら、思想、芸術、文化が権力といかなる関係を築いてきたのかを振り返ることにしよう。

はじめに、『君主論』で知られるマキアヴェリと、フィレンツェを中心に絶大な影響力を誇ったメディチ家についてのルソーの描写を見てみよう。

マキアヴェリは誠実な人であり良き市民であった。しかしメディチ家とのつながりのために、祖国の圧制のなかで自由への愛を隠さざるを得なかった。(中略)ローマ教皇庁はマキアヴェリの書物を禁書にした。彼がもっともはっきりと描写していたのは、まさにローマ教皇庁そのものだったからである。

ジャン・ジャック・ルソー『社会契約論』より

マキアヴェリが活躍したのは、王、貴族、聖職者などの有力者たちが思想家や芸術家を庇護しその創作を支えたルネサンスの時代である。フィレンツェを中心に活動したメディチ家は、文化・芸術の庇護者として特に有名である。たとえば、透視図法を発明したといわれ、フィレンツェの街を象徴するサンタ＝マリア＝デル＝フィオーレ大聖堂のドームを設計した ① も、メディチ家と密接な関係にあつた。マキアヴェリ自身も、著書『君主論』をメディチ家の小ロレンツォに、『フィレンツェ史』をローマ教皇となったジュリオ＝デ＝メディチに献呈するなど、メディチ家とは深い関係にあつた。マキアヴェリは小国が乱立するイタリア半島統一のために、のちに「マキアヴェリズム」と称されるような、権謀術数を用いる手段を選ばない政治家が必要なのだと信じていたと一般的には考えられている。しかし、ルソーは、マキアヴェリが本心では市民の自由を愛していたの

だが、フィレンツェの圧制の下で、自由への愛を隠していたのではないかと推察しているのである。他方、『君主論』から一般的に読み取ることができる「マキアヴェリズム」という思想を徹底的に批判したのは、『反マキアヴェリ論』を執筆した18世紀プロイセンの ② である。この本は、ロシアのエカチェリーナ2世をはじめとする各国君主と親しく交流し、啓蒙思想を説いていたヴォルテールの手によって出版されている。ヴォルテールは君主を通じて啓蒙思想を広めようとしていたとも考えられる。

このように、君主が思想家から影響を受けることもあれば、思想家が有力者から庇護される環境によってその内容を変化させることもあった。ルソーは後者の例をもう一つ挙げている。国際法の祖として知られるグロティウスである。ルソーは次のように記している。

グロティウスは祖国に不満を抱きフランスに亡命した。そこで、ルイ13世に取り入ろうとするあまり、自著をルイ13世に捧げ、人民からありとあらゆる権利を剥ぎ取って、それを王のものとするために、あらゆる手段を尽くしている。これは翻訳者のバルベラックも同様であり、その翻訳をイギリス王ジョージ1世に捧げている。しかし不幸にも、ジェームズ2世が追放されたために、ウィリアム王を王位篡奪者にしないように遠慮したり、歪曲したり、ごまかしたりせざるを得なかった。

ジャン・ジャック・ルソー『社会契約論』より

グロティウスは、ヨーロッパに広がった三十年戦争の悲惨さを見つめ、人類の平和を達成するために自然法に則った国際法が必要であることを著書『戦争と平和の法』で説いた人物として知られている。しかし、グロティウスの考える君主と人民の関係に対するルソーの評価は、上記のようにとっても手厳しい。グロティウスは、宗派对立の影響により祖国オランダからフランスに亡命をしているが、そこでグロティウスを庇護したのが絶対王政を確立したルイ13世であったというのもその理由の一つである。フランスでは、著書『国家論』で知られる思想家 ③ が国家主権に基づく国家統一を説き、ルイ14世の宮廷で活躍し王太子

の教育係を務めた ④ もさらに明確に王権神授説を唱えるなど、国内の諸勢力を抑え絶対王政をより強固なものとしていく動きが進んでいた。人民主権論者であるルソーには、絶対王政など到底容認することができなかったのである。

17世紀から18世紀にかけて、科学革命とそれに続く啓蒙の時代がおとずれる。まず、自然科学の領域で飛躍的に合理化が進行した。数学と実験を重視する手法で科学に革新がもたらされ、近代科学の形成期がおとずれたのである。これにともなって国家論にも合理的考察が向けられるようになり、王権の絶対性を神に求める王権神授説はしだいに勢力を弱め、自然法思想が台頭するようになった。哲学においてもイギリス経験論や大陸合理論が登場した。18世紀には経験論をさらに深化させて、懐疑主義を徹底したイギリスの哲学者 ⑤ が『人間本性論』を発表するなどして思想の発展に寄与した。

このような時代の流れのなかで、ルソーは歴史をふまえながらもさまざまな啓蒙思想から影響を受けて、すべての人間の平等を前提に、主権者である人民が社会契約を行って政治体を設立すべきことを説いたのである。そして、王政批判により発禁処分まで受けたルソーの思想は、このあとに勃発するフランス革命の理論的支柱となる。やがてルソーの言葉は人権宣言にも取り入れられ、遺骸は革命政府によって、名誉あるパンテオンの墓地へと葬り直されたのである。しかし、その後の恐怖政治は、ルソーの説いたところから、はるか遠くにいつてしまったと言ってよいだろう。

問 1 文中の空欄①～⑤のそれぞれにもっとも適切と思われる語を下記の語群から一つずつ選び、その記号を解答欄にマークしなさい。

[語 群]

- |           |                     |
|-----------|---------------------|
| A カント     | B ボシユエ              |
| C ミケランジェロ | D グランベール            |
| E スピノザ    | F ヨーゼフ 2 世          |
| G モンテスキュー | H デイドロ              |
| I ボーダン    | J カール 6 世           |
| K ヒューム    | L フリードリヒ=ヴィルヘルム 1 世 |
| M モンテーニュ  | N フリードリヒ 2 世        |
| O ライプニッツ  | P エラスムス             |
| Q ロック     | R ジョット              |
| S ラファエロ   | T デカルト              |
| U ブルネレスキ  | V ドナテルロ             |
| W ホッブズ    | X ブラマンテ             |
| Y ボッティチェリ | Z ベーコン              |

問 2 文中の下線部㉗～㉙に関して、下記の問(ア)～(オ)に答えなさい。解答は各問の選択肢の中からもっとも適切と思われるものを一つ選び、その記号を解答欄にマークしなさい。

(ア) 下線部㉗に関して、この時代に関する以下の記述のうち正しいものはどれか。

[選択肢]

- A メディチ家は、コジモがフィレンツェの元首になって以来、世襲によって18世紀までフィレンツェ地域を統治しつづけた。イタリア戦争のあとに周辺地域を獲得して領土を広げてからは神聖ローマ皇帝からトスカナ大公に叙された。
- B ダンテは、トスカナ方言で『神曲』を書くなどしてルネサンスを代表する詩人となったが、イタリアにおける教皇党と皇帝党の争いに巻き込まれ、皇帝党につくもそののち死刑判決を受けてフィレンツェで刑死した。
- C ルネサンスの中心地は、次第にフィレンツェからローマへと移っていったが、現在もヴァチカンに存在するサン=ピエトロ大聖堂は、教皇レオ10世が改築を指示し、ゴシック様式を確立した建築として有名である。
- D 神学教授であったルターは、教会が贖宥状を売っていることを批判するなどして破門されたが、ドイツではルター支持者らによって大規模な農民一揆が起きた。ルターははじめ農民に同情的だったが、のちに諸侯に一揆の徹底的な弾圧を求めるようになった。鎮圧後には一揆指導者のミュンツァーをはじめとする農民の多くが処刑された。
- E イタリア戦争で敵対していたフランソワ1世に選挙で勝利し、ハプスブルク家のカルロス1世がカール5世として神聖ローマ皇帝に即くと、フランス側についた教皇を苦しめるためにローマを劫略して荒廃させた。これによりルネサンスの中心は再びフィレンツェに戻っていった。

(イ) 下線部④に関して、この前後に起きたイギリスのできごとに関する以下の記述のうち正しいものはどれか。

[選択肢]

- A 王政復古を実現したチャールズ2世が、亡命先であったフランスの影響を受けてカトリックを保護して再び専制をはじめると、議会は王権によって行われる逮捕や投獄が法に基づいた正当なものかを審査する「審査法」を制定して対抗した。
- B クロムウェルは、鉄騎隊と呼ばれる軍隊を編制してネーズビーの戦いで議会派を勝利に導いたが、その後、急進的な水平派を議会から追放してチャールズ1世を処刑すると、この処刑に同情した長老派を徹底的に弾圧した。
- C イギリスの国制を特徴づける議会主権・立憲君主制を確立した「権利の章典」は、議会の同意なき課税や立法を禁止して王権を制限したが、ジェームズ2世がカトリックを擁護したために、カトリック信者の王位継承については議会の承認を条件にこれを認めている。
- D イギリスではこれより前、カルヴァン派が多数を占めるスコットランドに国教会を強制したことで反乱が起き、この鎮圧費用をまかなうために重税を課そうとしたチャールズ1世に議会は「権利の請願」を提出して対抗した。
- E ジェームズ2世が追放されると、娘のメアリとその夫でオランダ総督のウィレムが共同して王位に即いたが、つづいて即位したアン女王が死去すると、ハノーヴァー選帝侯であった遠縁のジョージ1世が即位してハノーヴァー朝となった。その後ウィンザー朝と名前は変わったがこの系統は現在の英国王室まで続いている。



(ウ) 下線部⑤に関して、この戦争に関する下記の①から⑤のできごとが年代の古いものから順に正しく並べられているものはどれか。

- ① アウクスブルクの和議
- ② ウェストファリア条約締結
- ③ オランダ独立戦争勃発
- ④ グロティウス『戦争と平和の法』発表
- ⑤ ベーメン反乱

[選択肢]

- A ③→①→④→⑤→②
- B ⑤→①→②→④→③
- C ①→③→⑤→④→②
- D ⑤→③→①→②→④
- E ③→④→②→⑤→①

(エ) 下線部㊦に関して、この動向に関する以下の記述のうち正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A ユグノーと呼ばれるカルヴァン派の新教徒とカトリック教徒の争いが激しくなると、プロテスタント勢力をスペインが、カトリック勢力をイギリスが支援するなどして外国の介入を招き、この宗教内乱は数十年にわたってフランスを苦しめた。
- B ルイ 13 世はカトリック教会の枢機卿であったリシュリユーを宰相とした。リシュリユーは、ルイ 13 世の治世下で、三部会の召集停止、高等法院の権限縮小、ユグノーの弾圧などを行ったが、三十年戦争ではハプスブルク家に対抗して新教徒側に立った。
- C ルイ 14 世は、フロンドの乱を鎮圧し、絶対王政確立の障害となっていた貴族や司法官を退けると、絶対王政最盛期を実現した。傭兵を用いたヨーロッパ最大の軍隊で多くの戦争を行い、スペイン継承戦争の結果、孫をフェリペ 5 世としてスペイン王位に即け、ジブラルタルやニューファンドランドを獲得するなどして、国力を大きくのばした。
- D メディチ家出身のカトリーヌ＝ド＝メディシスは、息子が若くしてシャルル 9 世として即位すると摂政として実権を握り、サンバルテルミの虐殺を策謀したと言われている。シャルル 9 世が暗殺されたことでヴァロワ朝は絶えたが、そのあとも長期にわたって権力を維持しつづけた。
- E ブルボン朝をひらいたアンリ 4 世はユグノーであったがカトリックに改宗し、そのうえでユグノーの信仰を認めるナントの王令を發布してユグノー戦争を沈静化させた。しかし、ルイ 14 世によって王令が廃止されると、ユグノー戦争はふたたび激しさを増した。

(オ) 下線部④に関して、この時代に関する以下の記述のうち正しいものはどれか。

[選択肢]

- A アダム＝スミスは、道徳感情を出発点にして、国家の干渉を排した自由放任主義を主張する『諸国民の富』を著した。スミスの理論を継承する古典派経済学はマルサスやリカードらによって進展していった。
- B 主著『富の形成と分配に関する諸考察』で知られるネッケルは、ギルドの廃止や穀物取引の自由化を成し遂げ、フランス財政の改善に寄与したが、急速な改革をのぞまないテュルゴーらの反対に遭い財務総監の職を追われた。
- C コルベールは東インド会社再建や保護貿易を推進するなどして財政再建を達成し、このような重商主義政策はコルベール主義とまで呼ばれたが、他方、文化面でもアカデミー・フランセーズを創設するなど科学や文化の振興に大きく寄与した。
- D ニュートンは、万有引力の法則など多くの物理学的・数学的発見をしたが、物体の運動を神なしで説明する理論は、彼が無神論者であったことも手伝って、キリスト教世界から警戒されその著作が禁書となることもあった。
- E ラヴォワジエは、燃焼が酸素との結合によって生じるとの燃焼理論や質量保存の法則を発見するなどして名声を得て、フランス革命後の科学界を牽引し要職を歴任したが、フランス革命が終結しナポレオンが政権につくとその座を追われた。

〔IV〕 次の文章を読み、下記の問に答えなさい。

第一次世界大戦は中東諸国を翻弄し、その影響は現在まで続いている。

第一次世界大戦では、同盟国側と協商国(連合国)側のいずれも、内部の結束を固めるとともに、中立国を味方に引き入れるため、戦後の敵領土・植民地の分配に関する秘密条約を結んだ。また、植民地や民族独立運動から支援を得るため、それぞれにその自治や独立を約束した。特にイギリスは、アラブ人とユダヤ人の双方に対して、パレスチナを含む地域での独立支援を約束して協力させた。このことが、現在にまで続く紛争の大きな一因になっている。

オスマン帝国は、第一次世界大戦に同盟国側で参戦して敗戦し、セーヴル条約によってアラブ地域やアナトリアの一部などを失った。これに対して、ムスタファ・ケマルは、1920年にトルコ大国民会議を招集し、セーヴル条約を拒否するとともに、1923年にローザンヌ条約によって領土回復や不平等条約撤廃を勝ちとった。彼は、トルコ共和国を樹立して初代大統領となり、同国の近代化に取り組んだ。

エジプトは、1914年からイギリスの被保護国となっていたが、第一次世界大戦後に ① 党を中心に独立運動が行われ、1922年にエジプト王国が成立した。さらに、1936年にエジプト＝イギリス同盟条約によって独立国としての地位が一部改善されたが、イギリスはスエズ運河一帯の兵力駐屯権を維持続けた。その後、1956年にエジプトがスエズ運河の国有化を宣言するに至った。

② 朝のイラン(ペルシア)は、第一次世界大戦中、中立を宣言したが、イギリスとロシアの介入を受けた。戦後、③ がクーデタによって実権を掌握し、1925年にはシャー(国王)に即位し、新たにパフレヴィー朝を開いた。しかし、国内の石油利権は1951年にイランが国有化するまでイギリスが持ち続けた。

アラビア半島では、④ が、イギリスの援助を受けて、ヒジャーズ＝ネジド王国を建国し、1932年にサウジアラビア王国へと改称した。

上記以外の中東地域においても、各国の委任統治領・被保護国であった地域が、第二次世界大戦後までに、それぞれ独立していった。しかし、前述のイギリ

スによるアラブ人とユダヤ人の双方に対する独立支援の約束や各国による委任統治・保護関係は、第二次世界大戦が終結した後も、中東地域における度重なる戦争の大きな原因となった。さらに、近年は、中東地域に対するアメリカ合衆国の影響がより大きくなってきている。

2010年末以降、チュニジア、リビア、エジプトでは、民主化運動によって独裁政権が倒れて ⑤ と呼ばれたが、急速な民主化の流れは混乱をもたらした。シリアでは、内戦によって多数の難民が発生し、その難民はヨーロッパにまで押し寄せたため、2016年にEUはギリシアに密航してきた非正規移民を送還する合意をトルコと結んだ。また、2014年には、IS(「イスラム国」と称する過激派組織がイラクとシリアから支配を拡げ、世界に脅威をもたらした。

問 1 文中の空欄①～⑤のそれぞれにもっとも適切と思われる語句を下記の語群から一つずつ選び、その記号を解答欄にマークしなさい。

[語 群]

- |               |               |
|---------------|---------------|
| A タキン         | B デタント        |
| C イブン=サウード    | D ワタン         |
| E メフメト6世      | F アラブの春       |
| G セルジューク      | H プールナ=スワラージ  |
| I ムハンマド=アブドゥフ | J ムハンマド=アリー   |
| K カージャール      | L ワッハーブ       |
| M ファーティマ      | N ホメイニ        |
| O アブデュルハミト2世  | P ワフド         |
| Q サーマーン       | R シオニズム       |
| S インティファーダ    | T パース         |
| U 共和人民        | V サファヴィー      |
| W マムルーク       | X レザー=ハーン     |
| Y マフディー       | Z ムスタファア=カーミル |

問 2 文中の下線部㉗～㉙に関して、下記の間(ア)～(オ)に答えなさい。解答は各問の選択肢の中からもっとも適切なもの一つを選び、その記号を解答欄にマークしなさい。

(ア) 下線部㉗に関して、当時のイギリスの戦時外交に関する次の記述のうち正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A イギリス、フランス、ロシア、イタリアの4国間で、イタリアが連合国側で参戦することを条件に、南チロル、ダルマティア、フィウメ、トリエステをイタリアに割譲することを約束するロンドン秘密条約を結んだ。
- B メッカの太守フセインとフセイン・マクマホン協定を結び、ロシアとの交戦を条件に、戦後にオスマン帝国からアラブ国家が独立することを認めた。
- C イギリス、フランス、ドイツの3国間で、戦後のオスマン帝国領の扱いを定めたサイクス・ピコ協定を結んだ。
- D 1917年、ユダヤ人の財政支援を期待して、イギリスのユダヤ人協会会長ロスチャイルドに対してバルフォア宣言を行い、ユダヤ人の「民族的郷土」建設への支持を約束した。
- E インドの戦争協力を得るため、非暴力・不服従運動を開始していたガンディーらに対して、責任政府と自治機構の実現を約束した。

(イ) 下線部④に関して、ムスタファ＝ケマルは、1922年にスルタン制を廃止し、1924年にカリフ制を廃止した。このスルタンとカリフに関する次の記述のうち正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A スルタンは主にスンナ派の政治権力者の称号であり、その称号を最初に授かったのはアッバース朝を建国したトゥグリル＝ベクである。
- B カリフは、ムスリム(イスラーム教徒)の宗教共同体であるアミールの代表者の呼称である。
- C カリフという呼称は、最初にアブー＝バクルが「アッラーの使徒の代理人(後継者)」を名乗ったことに起源を持つ。
- D 第3代正統カリフのアリーが『クルアーン(コーラン)』を編纂させた。
- E トルコ民族主義を中心とするスルタン＝カリフ制は、19世紀に誕生したパン＝イスラーム主義とは相容れなかった。

(ウ) 下線部⑤に関して、(i)独立した国と(ii)その独立前に委任統治権を有していた国の組合せとして正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A (i) アフガニスタン — (ii) イギリス
- B (i) イラク — (ii) ドイツ
- C (i) レバノン — (ii) フランス
- D (i) トランスヨルダン — (ii) フランス
- E (i) シリア — (ii) イギリス

(エ) 下線部⑤に関して、中東地域で起こった戦争に関する次の記述のうち正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A 第1次中東戦争は、国際連合のパレスチナ分割決議を受けて、ユダヤ人がイスラエルの建国宣言をし、それに反対するアラブ諸国がパレスチナに出兵したことにより始まった。
- B 第2次中東戦争は、アラブ民主主義の高まりやパレスチナ難民によるパレスチナ解放機構(PLO)の設立などを背景として起こった。
- C 第3次中東戦争では、アラブ側がシナイ半島を回復した一方で、イスラエルはガザ地区、ヨルダン川西岸、ゴラン高原を占領した。
- D 第4次中東戦争では、エジプト大統領であったムバラクがシリアとともにイスラエルを攻撃したのに対して、イスラエルはアメリカ合衆国による武器援助を受けてこれに応戦した。
- E 第4次中東戦争後、エジプトはイスラエルとの和平に転じ、エジプト＝イスラエル平和条約を締結した。アラブ諸国とパレスチナ解放機構(PLO)は、このようなエジプトの政策を高く評価した。



(オ) 下線部㊦に関して、中東地域に対するアメリカ合衆国の影響に関する次の記述のうち正しいものはどれか。

〔選択肢〕

- A 1980年に始まったイラン＝イラク戦争では、ソビエト連邦がサダム＝フセイン大統領の率いるイラクを支援したのに対して、アメリカ合衆国はイラクに宣戦布告して攻撃した。
- B 1990年にイラクのサダム＝フセイン大統領がクウェートに侵攻すると、アメリカ合衆国のブッシュ(父)大統領は、1991年に国際連合安全保障理事会の決議に反して多国籍軍を組織してイラク軍をクウェートから撃退した。
- C 1993年に、イスラエルのネタニヤフ首相とパレスチナ解放機構(PLO)のアラファト議長は、アメリカ合衆国のクリントン大統領の仲介により、相互承認とパレスチナ暫定自治政府の樹立について合意した。
- D 2001年9月11日にアメリカ合衆国で同時多発テロ事件が起こると、アメリカ合衆国のブッシュ(子)大統領は、イランが事件に関与しているとして、2001年10月にイランに対する軍事行動を起こした。
- E アメリカ合衆国のブッシュ(子)大統領は、イラクが大量破壊兵器を隠し持っているとの理由で、2003年にイギリスとともにイラクを攻撃してフセイン政権を打倒した。





